



## 指揮者 村上 寿昭

むらかみ としあき

1974年7月22日 東京生まれ。

ピアノを塩野圭子氏に師事。15歳より指揮を高階正光氏に師事。桐朋学園大学にて指揮を小澤征爾、黒岩英臣、秋山和慶の各氏に師事。大学在学中から、新日本フィル、サイトウ・キネン・オーケストラにて、その後も水戸室内管、ウィーン国立歌劇場で小澤征爾氏のアシスタントとして活躍。1996、97、04年サントリーホールホール・オペラにてグスタフ・クーン、ダニエル・オーレン、ニコラ・ルイゾッティ各氏のアシスタントを務める。

1997年渡独。ベルリン国立芸術大学でマティアス・フスマン教授に師事。また2000年からは文化庁海外研修者として、またローム ミュージック ファンデーションの援助を受け、オーストリア・ウィーンへ。ウィーン国立音楽大学でレオポルト・ハーガー教授、湯浅勇治氏に師事。

1999、2002年サイトウ・キネン・フェスティバル松本、武満メモリアル・コンサートを指揮。2000年タングルウッド音楽祭にフェローとして参加し、小澤征爾、ロバート・スパーノ、アンドレ・プレヴィンの各氏に師事。また翌年にはアシスタントとして招待を受ける。

2002年小澤征爾音楽塾にて《ドン・ジョヴァンニ》、またNECスーパータワーコンサートにて新日本フィルを指揮しデビューを果たす。2010年にはびわ湖ホールにて《ヘンゼルとグレーテル》を指揮。またヨーロッパではベルリン響、リトアニア国立管などを指揮している。2004年～オーストリア・リンツ州立歌劇場にて、2006～12年ドイツ・ハノーファー州立歌劇場にて、常任指揮者として数多くのオペラ、バレエを指揮。

2016年小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXIVにて《こうもり》を指揮（小澤征爾氏と振り分け）。

近年は教育活動にも力を入れ、音楽大学オーケストラなどの指導も活発に行っている。また室内楽、歌曲の伴奏など、ピアニストとしても活動している。

東京藝術大学講師、桐朋学園大学音楽学部講師、新国立劇場オペラ研修所講師。



## マーカス・ロバーツ・トリオ

ピアノ:マーカス・ロバーツ  
ドラムス:ジェイソン・マルサリス  
ベース:ロドニー・ジョーダン

1995年、マーカス・ロバーツによって創立。

ジェイソン・マルサリスが創立当初よりドラマーを務め、グループの発展に重要な役割を果たしてきた。2009年にロドニー・ジョーダンが加わり、その豊かな音楽性と深い理解は、いまやトリオのサウンドに欠かせないものとなっている。

この3人のミュージシャンで構成されるマーカス・ロバーツ・トリオは、当意即妙な音楽作りと独創的な想像力で知られる。ロバーツはこのトリオの創立により、音楽の方向性を探る上で、対等なパートナーとして3つの楽器に等しく光が当たる、新たなジャズ・トリオのスタイルを生み出した。いずれのメンバーも、旋律や和声構造を損なうことなく、テンポ、調性、拍子など、曲のさまざまな要素をいつでも変えることができ、あたかも最初からそう決めてあったかのように、軽々と自由に音楽の方向を転換してゆく。

マーカス・ロバーツは常々、歴史を重視してきた。彼にとって、偉大なミュージシャンとは、自らが携わる芸術の歴史を深く理解し、熟知している者のことである。そのように自在に操ることができてこそ、真に価値のある斬新な音楽の創造が可能になる。マーカス・ロバーツ・トリオの極めて現代的なサウンドは、ニュー・オーリンズに遡るそのルーツから生じ、コルトレン・カルテットのグループ即興スタイルやビバップ・ミュージシャンの超絶技巧を経て、モダン・ジャズまで続く流れの中に培われたものである。マーカス・ロバーツ・トリオのサウンドは、パワフルでリズムック、力強くメロディックであり、グループおよび個人の高度な即興に溢れている。

マーカス・ロバーツ・トリオ <http://marcusroberts.com>